

# 弥生時代の玉作り

弥生時代の玉の材料には、緑色や青色が好まれたようで、  
緑色凝灰岩、碧玉、ヒスイ、ガラスの4種類に大きく  
分けられます。

玉作りは日本海側地域を中心に、各地で行われました。

弥生時代前期～中期（今から2300～1900年前）は、玉  
作りの道具は全て石製です。製作は敲石で荒く割り、石鋸  
（石製の小さな鋸）で切って成形し、磨石・砥石で磨き、  
石針で孔をあけ、最後にまた砥石で仕上げる工程です。

弥生時代後期（今から1700年前）になると玉作りの製  
作道具に鉄製品が加わります。敲石で荒く割りますが、鑿・  
鑿・鉋などの鉄の道具で石を押し剥がして成形し、磨  
石・砥石で磨き、鉄錐で孔をあけ、最後にまた砥石で仕上  
げたようです。

玉作りにおける鉄製品の使用によって北陸・山陰・九州  
北部と大陸（主に朝鮮半島）の間には活発な交流が生まれ、  
大陸からは多数の鉄製品と鍛冶技術がもたらされました。

野々市市では、徳丸ジョウジャグ遺跡をはじめとする市  
内北部に広がる弥生時代後期の集落遺跡から玉作りの製作  
道具や管玉の未成品がみつかっており、各集落で玉作りが  
行われていたことがわかっています。